▼▼▼▼ 第三十一回現代俳句評論賞　受賞作 ▲▲▲▲

◆加藤楸邨

—その父と「内部生命論」—

神田ひろみ

（一）　楸邨と父

楸邨とその父加藤健吉（一八六九―一九二五）との間に二つの共通点がある。第一点はその父と楸邨のキリスト教受洗の事実である。

父は日曜日になると、家族全部をつれて教会へ行った。私はこれが頗る不平だった。ヤソ、ミソ、ヤッツケロ、こういって近所の子供にいじめられた。おまけに大切な休みが半分だけ縮められてしまう。日曜になると、よく偽病をつかったものである。

こんな風で、父は端厳で、怖くて、煙たかったが、私は実に好きだった。私は父は偉いという強固な信頼感を根づよく持っていた。（「父の本」『加藤楸邨全集』以下『全集』と略、第六巻）

また「祖父は酒田の人で漢学畑の人だったから、父も十歳そこそこで漢籍になじんだらしいが、十四歳の時祖父が死んで、明治初年の没落組に入った父は、十六歳でもう北海道に渡りアイヌの中に立ちまじって荒い生活を続けていた。（中略）私の物心ついてからの父は鉄道の駅長だったのだが、しきりに漢学に近づけたかったようだ。一方父はクリスチャンでもあった。『内村鑑三全集』には丹念な書入れがしてあったのを覚えている」（「私の読書遍歴」同前）という。北海道に渡った父健吉は二十代の終わりに渡米の志を抱いて上京し、明治三二年横浜第二美普（みふ）教会で畑純三郎（純三とも）氏からキリスト教の洗礼を受けている。渡米資金を得るために就職した鉄道の、出札の仕事で知り合った外国人宣教師について英語を学んだのが入信の機縁になったものと楸邨は言う。そしてこの辺りのことは「今からみて、父の上に典型的な明治初期の日本人の姿を見出す」（「父の本」）ことができると述べている。

楸邨はこの父の薦めで一関中学二年の一四歳の時、一関教会で一九一九年一二月七日東北学院院長D・B・シュネーダー氏より洗礼を受ける。

十六の頃、父に勧められて洗礼を受けたりしたが、中学を出る頃はすっかり神を見失った人間になっていた。（「私の読書遍歴」）

「父の死んだ後、父の枕頭にあった大型の革表紙のバイブルを開けた私は、そこに引かれた朱線を辿っていった。（中略）書架には『内村鑑三全集』の水浅黄の色がもう手ずれして並んでいた。（中略）これも朱線と朱の書入れが充満していた。ところどころに父の偶感らしきものが見つかった。たとえば、『我は禱りは声に発せざるを好むも如何』というような類」（「父の本」）を一九歳の楸邨は読んで「そうかとひとり肯くような思いであった」（同前）と述べる。「かくれた求道者であった父の姿は、またそのまま楸邨の姿であった」（「人さまざま加藤楸邨」一九五三）という山本健吉氏の見解も「かくれた求道者」という点に楸邨と父の共通性を見ているのである。

第二の共通点は、その父と楸邨が少年時代を東北地方で過ごしたことである。

私は紛れもなく北方型だ。（「達谷私語」以下旧漢字旧仮名遣いは現代のものに置換、一九四八）

と楸邨は言う。この視点からすれば楸邨はまったく北方の人、冬の俳人である。その第一句集の名は『寒雷』（一九四〇年刊）で、最後の書句集は『雪起し』（一九八七年刊）である。没年平成五年に出版されたのは『芭蕉の山河―おくのほそ道私記―』であった。『加藤楸邨全句集』（二〇一〇年刊）「季語別索引」によればその六十二年の句業中最も数多く詠んだのは雪の句である。（以下例句は『加藤楸邨全句集』より）

寒雷やびりりびりりと真夜の玻璃　楸邨
さえざえと雪後の天の怒濤かな
落葉松はいつめざめても雪降りをり
吹越に大きな耳の兎かな

「寒雷や」や「雪後の天」「吹越に」の句はそれぞれ句集名になったものである。吹越というのは越後の吹雪が谷川岳の南の方へ岳を越えて青天に舞ってくる雪の名である。「落葉松は」、「吹越に」の両句は楸邨の代表作と言えるものである。楸邨の父を詠んだ作品をあげてみる。

酒田は亡父の生れし地
蚊帳いろにうすうすながれ天の川　楸邨
冬の浅間は胸を張れよと父のごと
秋の雲父の墓亡き父の国
蜩や石に耳あて父の国

いずれも楸邨の父への追懐がうかがわれる句である。酒田が父の生地であることから、父の国とは出羽の国である。酒田で日本海にそそぐ最上川は楸邨にとって父の川である。

獅子独活に降り青々と出羽の雨　楸邨

流火草堂（註・安東次男）夫人に出羽より便りして

筒鳥やいま雨を脱ぐ最上川

最上川につつこみ青菜振り洗ふ

楸邨は壮年の父の転勤によって国分寺小学校（東京）御殿場小学校（静岡）原町小学校（福島）と変わり、中学校を一関中学（岩手）新発田中学（新潟）金沢一中（石川）と度々の転校を余儀なくされた。それゆえ楸邨は「郷里という感じの土地を持っていない」（「冬欅」『全集』第六巻）というが、原町小学校の時代について

その感じやすい時期は幸いなことに、原町の同級生達の親しんでくれたことであたたかくつつまれたようである。私は安住する故郷を未来にだけしか描けないのだが、若し過去に人並の故郷の感じを探ろうとするなら、原町が思い出される。（同前）

と述べている。原町の次に移った一関については

北上川、一関中学生たりし頃常に歩き、
啄木を愛誦せし径あり

柳散る昔啄木のまた我が径　　楸邨

高舘

秋蟬のこゑ澄み透り幾山河

平泉

教師となり僧となり蟬に再会す

などの句がある。少年の頃移り住んだ地がそのまま芭蕉の「おくのほそ道」であったのは楸邨の芭蕉研究における父の無形の遺産と言えよう。楸邨は父のこの生涯を

維新の雄藩出の人々の絢爛たる動きとはちがって、東北の日の当たらない庶民の辿った歩みであり、そこからキリスト教というものをとおして近代の夜明けを感じとろうとしていたようである。（「レバノン山を越えて」『全集』第九巻）

と見直す。楸邨が自分を「北方型」と言うときそこに「雄藩出の人々の絢爛たる動き」に対する「東北の」「庶民」としての今にいたる屈折があろう。そしてその父が「近代の夜明けを感じとろうと」新しくキリスト教に接近して行ったように楸邨もまた、いつか故郷を「未来へ未来へ押しやって未知の世界にのみ故郷を見るようになっていた。私の俳句の動かずにいられないのも、こういうところに性格づけられていた」（『寒雷』「後記」）というのである。楸邨が自身を「北方型」と断定した文章には「北方の無愛想な沈黙」（「達谷私語」）という言葉が続く。その「無愛想」と、時に楸邨を象徴する語「沈黙」について確認する。

（二）　楸邨の沈黙

楸邨は「俳句は自得するほかに道はない」（「新稿俳句表

現の道」『全集』第五巻）と述べ、句会の席上で懇切に俳句の指導をすることはなかった。また楸邨が昭和一五年「俳句評論」の「俳句性論議」の座談中、季の論議に行き詰まり林原耒井、安騎東野の両氏に向かって「何でも結構ですが、とにかく仕方がない。そうだと思えるまではこうしてゆくほかない」（『加藤楸邨初期評論集成』以下『集成』と略す、第四巻）と言ったきり鼎談を終わらせているのは「無愛想」と言う他はない。そして「この態度は、科学と格闘して、常に、我々の詩歌が、よしんば組みふせられようとも、その下から、『やはり負けたような気がしないですね』と言わせるところの最後のもの」（「腹の虫」『集成』第五巻）と述べているのは強情な「無愛想」と言える。

一方「沈黙」の「告げない」という面に着目すれば誰でもこの一句を思い浮かべるであろう。

鰯雲人に告ぐべきことならず　楸邨

楸邨の詳しい自解のない掲句に対するさまざまな解釈のうち、この作品に潔癖で自恃の念を含んだ作者の「含羞」を見るとして、楸邨の含羞を含む作を挙げるとしたら「ためらわずにこの句を選ぶ」（岡崎佳子『真実感合の軌跡―加藤楸邨序論』二〇〇一年刊）という論がある。楸邨の沈黙に自恃の念が含まれるというのである。沈黙に関わる楸邨の句を掲出してみる。

鵙もだす歔欷は沈黙より易し　楸邨
こゑあげてしまへば墓よりあはれ
冬鵙や黙つて死ねとかつての日
青虫のひたゆくは言持たぬため
ひとり黙せばひとりきらめく犬ふぐり
不満いつぱいに生きてゐるなら虹に告げよ

これらの句の、「歔欷は沈黙より易し」や「こゑあげてしまへば」小動物より哀れだという句からは楸邨の沈黙に「自恃の念」、自制の色彩が濃いことが伝わってくる。「冬鵙や」の「黙つて死ね」の句は戦争や言論圧迫への怒りがこめられていよう。「青虫の」「ひとり黙せば」の作は言い訳をしないでいる状態という意味で、楸邨の理想の自画像であろう。「不満いっぱいに」の句は遺句集『望岳』（一九九六年刊）中の作品で「鰯雲」の句に対する応答句である。それがやはり「虹に告げよ」であって、あくまで「人に告ぐべきことならず」なのである。実際、楸邨は人に告げないことが多かった。

例えば昭和一七年四月号を最後に「馬酔木」同人欄から、石田波郷とともに楸邨の作品が見られなくなったことについて楸邨は何も発言していない。

昭和一五年一二月には戦時の思想統制の一環として日本俳句作家協会が結成され、これは昭和一七年に日本文学報国会の俳句部会に包摂され、この期の新興俳句運動は弾圧され次々と発表の場を失っていった。この時期に

つひに戦死一匹の蟻ゆけどゆけど　楸邨
兜虫視野をよこぎる戦死報
蟻地獄かく長き日のあるものか

このような厭戦的な句を楸邨は『颱風眼』（一九四〇刊）に掲載している。これが可能であったのは「水原秋桜子の庇護」（田川飛旅子『加藤楸邨』一九八三年刊）によるものであろう。昭和一七年春頃にはこの秋桜子氏による庇護も「限界に来つつ」（同前）あって、波郷と楸邨は「馬酔木」を退かざるを得なかったと推測される。

また初期の頃から「寒雷」の編集に携わっていた沢木欣一、原子公平、菊池卓夫らの四氏が昭和二二年の末その膝下を離れた経緯についても楸邨は沈黙している。

この頃楸邨は戦前に発表した「俳句はものの言えぬ芸術である」（「芭蕉への通路」一九四一）という提言について、中村草田男氏から「『俳句に於ては十分に物が言えなかったとしても致方がない』というに似通った錯覚を貴君に与えていはしないでしょうか」（中村草田男「楸邨氏への手紙」一九四六）と糺される。質問に対して楸邨は表現において念願しているのは「この短詩型の中にどうしても描写に伴う敍述だけではあらわにあらわしきれぬ自己内容をどう生かすかという点」（「俳句と人間に就いて—草田男氏への返事—」『全集』第五巻）において『物いわぬ表現』を生かして」（同前）行くことであると応える。同じく「楸邨氏への手紙」は、楸邨が戦時中に軍の勢力者と結びつき所謂便乗的行為があったのではないかと尋ねている。軍の勢力者とは「寒雷」に所属している秋山邦雄（俳号・久仁緒）などを指すであろう。楸邨は

> 人間として久仁緒を親愛したので、軍人であり、権力者であるから愛したのではない。（「俳句と人間に就いて—草田男氏への返事—」）

と述べ便乗の意図は全くなかったと説く。そして戦中の用紙不足などによる雑誌の統廃合から「寒雷」が免れたことについては「いつ果てるともない戦のさなかに、いつまでつづくかわからぬ種々の圧迫感の中にあって、やはり俳句の息づくところがどうしてもほしかった。私はそういう希いのままに「寒雷」ののこったことを、自分の生かしたいと思う俳句の方向を生かしてゆく上でよろこばぬ訳にはゆかなかった」（同前）とし、

> 今から冷静に考えるなら、こうした場合その必要なしという方が私としては潔い態度かもしれなかった。（同前）

と表白している。そして責任は戦争の実相を見抜けなかった「私の聡明ならざること、弱いこと」（同前）にあり、この責については「終生にわたる自分の生涯を以て実証する（中略）私の句にいつか私自身の人間的根柢から生まれ出る光をあせらずに待ちたい」（同前）と述べる。

同じ頃戦時中に弾圧を受けた人々の結成した「新俳句人連盟」では日本報国文学会に加わった俳句結社の主宰らを軍国主義に協力した俳壇における戦犯、として追求していた。「寒雷」には戦中から先に述べた秋山久仁緒や清水清山、本

田功等の目に立つ職業軍人が加わっていたところから楸邨は戦争協力者批判の矢面に立たされていた。

また桑原武夫氏は「第二芸術―現代俳句について―」(一九四六)を著し「現代俳句に人生を盛ることが、いかに困難であるか」「かゝるものは、他に職業を有する老人や病人が余技とし、消閑の具とするにふさわしい」等と俳句の前近代性を批判する。同氏は翌昭和二二年四月に「野ざらし紀行」中の「猿を聞く人捨子に秋の風いかに」をめぐって

加藤楸邨氏が、現実の捨子に当面しての苦悩だとか、人生道と風雅道の対立とか、俳人の知性などゝいっているのは、おかしい。こゝに人生などありはしない。一個の美文があるのみである。(「芭蕉について」一九四七)

と非難する。桑原氏の論を楸邨は、俳句が人間の認識形式として適当であるかという懐疑の形で提出されたと受け

いままで俳句がこの問題を解決していないという点で、俳句の弱さを認めないわけにゆかない。(「俳句は生き得るか」『全集』第五巻)

と述べ、この弱さや不安を手がかりに「人間の要請を生かす場としての俳句」(同前)表現を求めて行くと答える。こうした時期に門下の四人の若手が「文学上の意見の相違」(『加藤楸邨』)から「寒雷」を去ったことについて、楸邨の

失意はかなり深かったと思うんですが(中略)私の前では四人のことは一言も言ってませんね。(金子兜太「思い出すこと」二〇一〇)

というのである。

また昭和二三年波郷は「馬酔木」同人に復帰するが、楸邨は復帰しない。これについて

波郷君が晩年になって、一度「馬酔木」に居たものは、皆帰って来る方がよいと思ったらしく、方々へ丁寧な手紙を出していたようだ。(中略)楸邨君は波郷君にどう答えたか、私は知らない。ただ楸邨君が荻窪の病院に入院していた時、私は見舞いに行って、「俳人協会におはいりなさい」とすすめた事がある。楸邨君には、私の気持ちがわかったらしいが、いろいろ事情もあるらしく、実現するにはいたらなかった。

波郷君が亡くなった告別式の日に(中略)波郷君の弟子の人達が棺を担いで行こうとした。そこへ会葬者の中から楸邨君が出て来て、弟子の人達に会釈したのち、自分もその一隅を担いだ。「ああ、この二人は長いこと馬酔木発行所で机を並べて居たのだったな」と私は思った。波郷君が楸邨君へ出した手紙の中にも、きっとそのことが書いてあ

ったにちがいないのである。（水原秋桜子「粘りづよさ」一九七九）

と記されている。楸邨は「馬酔木」に復帰しなかったことについても黙ったまま終わっている。その「語らない」「沈黙」という事実に楸邨を解明する鍵があると考える。楸邨の二十代までの読書体験を振り返った文に

この外北村透谷、島崎藤村のものなど、よくわからないままに父の書架からぬきだして読んだ。（「私の読書遍歴」）

という箇所がある。この島崎藤村への敬愛の言葉は楸邨の文の随所に見られる。最初の俳号が「冬村」（とうそん）であったことを「楸邨というのも始めからの号ではない。その前は柊村といい、更にその前が冬村であった」（「楸について」『全集』第六巻）と述べ、出版されたばかりの藤村の『夜明け前』上下二巻を出発前夜に購入して車中読みふけり「翌日歩いた馬籠や妻籠は、『夜明け前』の世界と交錯し、ひとしお生々しかった」（『隠岐』一九四二年刊）と著し「藤村氏は今度の日本の颱風的命運をどう見て居られたであろう。この嵐の夜明けをもう一度書いて貰いたかった」（「秩父の夜」一九四三）と述べている。

志城柏氏の「一漂泊者の像―加藤楸邨論―」（一九五八）は、藤村が木曽の馬籠の本陣の子として生まれ、楸邨が駅長の子として生まれ二人の父がともに旅人の送迎を業としたこと、両者の父がまた一種異様な一徹の求道的性格を持っていたという類似性に触れ、楸邨に沈黙をモチーフとする句が多いのは「どんな自由のもとでも所詮言葉に纏めることの不可能なあるカオスが彼を沈黙せしめたのだ」という。楸邨を沈黙させる「あるカオス」の指摘は、創作に関して楸邨の内面を支配する大きな力の存在を考えさせるものである。楸邨と藤村についてはこのような論及が見られるが、楸邨と透谷の関係は詳らかでない。楸邨と透谷の「内部生命論」の関連について検討する。

（三）　楸邨と「内部生命論」

楸邨と透谷の接点は少なくとも四点あると考える。

楸邨の俳人としての出発は同時に「馬酔木」の論客としての出発でもあった。それは楸邨の俳論を纏めた単行本『俳句表現の道』（一九三八年刊）が、第一句集『寒雷』より先に刊行されていることからも明らかである。

楸邨の最初の俳論「「調べ」に関する研究の一例」は、昭和六年「馬酔木」十月号に水原秋桜子氏の「「自然の真」と「文芸上の真」」論とともに掲載されている。秋桜子氏のこの論文は新興俳句運動の一契機となったもので、ここから昭和九年ごろまでが新興俳句運動の前中後の三期のうちの前期とされる。中期は昭和一二年の日支事変勃発までの無季俳句の時期、後期は戦争俳句へと変転した時期と区分される。新興

俳句運動が有季定型の「馬酔木」の傾向から変転した中期頃の、昭和一〇年「俳句研究」二月号に楸邨の一文を見る。

いうまでもなく、作品には陰翳があってほしい。然し、陰翳はあくまで陰翳であり内部生命の反映であって、決して表現の曖昧であってはならぬ。(中略)
新興俳句陣の人々が各々新精神新題材新表現に努力することは尊い。然しながら不完全な表現に終始し、未完成の美を、完成を希求することなしに肯定するとしたなら、私は真の新興俳句のためにとらない。どこまでも芸を重んずる精神を失いたくないものである。芸とは高い内部生命との渾一無碍に融合した表現をいうのである。(「新興俳句批判—定型陣より—」一九三五)

ここに「内部生命」という語が二度使われる。楸邨がこれを書いた前年の昭和九年は北村透谷の研究史上画期的な年であった。この時期的な一致を第一の接点と考える。

この昭和九年一月「明治文学研究」誌が創刊されそこにははじめてと言っていい実証的な「北村透谷著作年表」が掲載された。四月号は北村透谷特集である。ここに詩人で評論家で劇作家という透谷の多彩な側面が明らかになるのである。楸邨が洗礼を受けた一関教会のすぐ近くに東北有数の醸造家「熊文」の屋敷があった。明治二六年秋、傷心の藤村はその「熊文」に身を寄せ、藤村の親友透谷もまた一関に足跡を残している。このことが一関に住んだ楸邨と透谷の第二の接点である。また透谷が小田原藩の出身で、楸邨の父のように漢学の家から進んで英語を学びキリスト教に入信するという「典型的な明治初期の日本人の姿」を持っていたことが第三の接点である。第四の接点は透谷が散文のほかに

コーサンド氏(註・透谷は氏の東北伝道の通訳)より愈々免職の相談あり、
帰途歩上作
ぬら〱とからをはなれた蝸牛　　透谷
島崎兄の「夏草」を読みて
夏草のしげみに蛇の目のひかり
三日幻境
ひぐらしの聲の底から岩清水
骨二つならべて埋まれ花の塚
(註・右は吉野の西行庵に籠もる藤村を訪ねる星野天地に預けた句)
一本〱骨の白さよ
(註・右は星野天地の「塵塚をくずすひゞきか松の風」の付句)(勝本清一郎編『透谷全集』第三巻)

このような俳句を作っていたことである。俳句作家としてまた俳論の論客として歩みはじめていた楸邨は「よくわからぬままに父の書架からぬきだして読んだ」透谷の著作を改めてこの時期読み直したと考えるのである。透谷の評論「内

部生命論」中の文芸に関わるところを引いてみる。

文芸上にて理想派と謂うところのものは、人間の内部の生命を観察するの途に於て、極致を事実(リアリチー)の上に具体の形となすものなり。(中略)

瞬間の冥契とは何ぞ、インスピレーション是なり(中略)この感応は人間の内部の生命を再造する者なり、この感応は人間の内部の経験と内部の自覚とを再造する者なり。

(『透谷全集』第二巻)

右の論中の「文芸上の理想派」「瞬間の冥契」「感応」の三つの言葉と、楸邨の表現に関する『新興俳句表現の道』(一九五一年刊)や「俳句への橋」「真実感合」「俳句と人間的要請」などの論を対比させて楸邨がどのように「内部生命論」を咀嚼していったかを見てゆく。

「文芸上の理想派」

透谷が「内部生命論」の中で「文芸上の理想」としたのは主観的に人間の内部の生命の百般の顕象を観察する態度である。楸邨は詠まずにはいられないくらい「詩的実感」が澄んでくるのを「待つ」ことが大切と『新興俳句表現の道』に述べ、その「詩的実感」を「内的表現とか、内部形象とか名づけてよいもの」(同前)という。こうした楸邨の句作態度は写実的というよりは主観的であり「理想派」と言えるものである。そして透谷が「文芸上の理想派」の態度は「極致を事実(リアリチー)の上に具体の形となすものなり」と違うところはないのである。

「瞬間の冥契」

楸邨は「瞬間」について「今という時間は二度とは来ないし、今の自分というものは、今の時間の中でとらえないと後になって把握しようとしてももうできない」(「俳句への橋」『全集』第五巻)と述べている。透谷の「瞬間の冥契」(インスピレーション)を受けて「具体の形となす」という理念は俳人にとって「物の見えたる光、いまだ心に消えざる中にいひとむべし」という芭蕉の言葉を連想させるものである。芭蕉の表現方法を探っていた楸邨も透谷のこの「瞬間の冥契」という言葉に出会い瞠目したであろう。「内部生命論」の根幹は「内部の生命は千古一様にして、神の外は之を動かすこと能わざるなり」つまり内部生命には神以外のものは絶対に触れることができない、という透谷のキリスト教受容の精神から打ち立てられている。幼い頃から教会に通い少年時代に洗礼を受けた楸邨にとってこれは難しい思潮ではなかった。自己を投影しつつその背後にある透谷の芭蕉理解も含めて「内部生命論」を自身の表現論として楸邨は読み解いたのである。

「感応」

楸邨の終生の俳論「真実感合」は「把握と表現が一枚にな

るためには、真実感合という態度に徹する外はない」（「真実感合」同前）というものである。また「俳句の特性を通して人間の要請が生かされるところに、なまのままでない人間の新生がある。死んで生きるという方途である」（「俳句と人間的要請」同前）と述べている。透谷のいう「感応」とは「人間の内部の経験と内部の自覚とを再造する」ことであった。この「感応」の語は把握と表現の一体化をいう楸邨の「真実感合」の「感合」を想起させる。なぜなら透谷は「人間の内部の生命を再造する」ことを「感応」と言い、楸邨の言う「感合」は内部生命の「把握」を「表現」に「新生」することを意味していたからである。「新生」は透谷の「再造」に相当する。楸邨は

表現という細い針の穴を通して一度「死んで生き」なければならないのである。（「真実感合」）

とも言う。「死んで生きる」とは、透谷の「再造」の理念を俳句の表現の場へ一歩進めた言い方である。そしてこれは思うように物の言えぬ俳句の詩型に人間の要請を生かすには、物を言おうとして溢れそうな力と十七音に凝集しようとするその両方の力の重層性をもってすべきもので、この力が「一つに働くところに、定型も季語も新に見直される」（楸邨「俳句と新しい波―伝統・前衛の対立が生むもの―」同前）という楸邨の表現論に展開されていくのである。

楸邨の俳論形成の上に透谷の「内部生命論」は大きく作用している。これまで楸邨の「真実感合」論はその「芭蕉研究の一大成果」（矢島房利「真実感合の美学―楸邨の芭蕉研究―」一九六五）と論考されてきた。また楸邨自身が言うように「今の私の中に生きつづけている作句にあたっての物の観方のはじめ」（「俳句遠近」『全集』第六巻）となった西田幾多郎著『善の研究』における「主客合一」の概念の影響も「真実感合」論に見出されるであろう。これらに合わせて透谷の「内部生命論」をその視座に加えたなら「真実感合」論のダイナミックなところの理解が一層容易になると考える。「内部生命論」の影響が表れた楸邨の句をあげてみる。

楸邨

胡桃焼けば灯ともるごとく中が見ゆ
蝸牛いつか哀歓を子はかくす
銀漢やどこか濡れたる合歓の闇
あけび机上に口あく何か来つつあり
おぼろ夜のかたまりとしてものおもふ

「胡桃焼けば」の句は、硬い胡桃の殻を透かしてその内部の核があたたかくオレンジ色に輝く様子を詠んでいる。それは病の癒え始めた自分の生命の輝きのように楸邨に見えるのである。「蝸牛」「銀漢や」「あけび机上に」の作品中の「いつか」「どこか」「何か」の語の入った句は、内部生命を探る楸邨の無意識の視線から生まれたものと考える。「いつか」「どこか」「何か」のイメージは、「おぼろ夜」の作中に茫洋

として入り交じり、楸邨全体をかたちづくって行って、ものおもいの底に漂う。「おぼろ夜」の句は「あるカオス」や「混沌」というべきもの、そして「内部生命」についての集大成、楸邨の後期の代表作と言えるものである。波郷が亡くなったときに詠んだ楸邨の

十一月二十三日、火葬

秋の暮波郷燃ゆる火腹にひびく　　　　楸邨
灯の寒きこのしら骨が波郷かな

この二句の「腹にひびく」「しら骨」は、透谷が星野天地に託して親友藤村に送った「骨二つ」の句、天地の「塵塚をくづすひゞきか」に付けた「一本〳〵骨の白さよ」という透谷句の先例を知ると、楸邨と波郷が親友だったことが歴然と思い返される作品となる。　楸邨は最晩年になって『寒雷』の「後記」の「深淵の中から真に自分が見出したものを摑み出したかった。日常の常識と平安の底に、黙々と動いている自分の真の姿を掘り出したかった」という、自身の文を引き

それから今日まで私の俳句を作ってきた道は、この平凡な一筋を辿ることに尽きたといってよい。(『遥かなる声』一九九〇年刊)

と記す。「深淵の中から真に自分が見出」したものとは透谷のいう「内部生命」にほかならない。日常生活の底に生きて動く「自分の真の姿」を句作に摑み出すことに「尽きた」という楸邨のその「一筋」の道の終始に、明治期のキリスト教文学者北村透谷の「内部生命論」の深い痕跡が認められるのである。

楸邨は六十五年前に「私達の周囲をとりまいた戦時の掛声の多くは、虚偽に充ちていたことが明らかにされた今日ほど虚偽と真実とをみわける叡智の必要な時はないのだ。(中略)今こそ真実なるものは何か虚偽なるものを如何にして看破するか、ということに思いをひそめなければならない時なのだ。俳句はその時々の都合を詠う文学ではない」(「俳句的傷痕」一九四六)と述べている。私達はその昭和二〇年の敗戦以来の岐路に直面している。人間とは何か、人間が生きるとはどういうことかが問われている。

「俳句の中に人間の生きることを第一に重んずる」(一九四〇)と楸邨は宣言していた。こうした課題を負いながら短詩型の桎梏をその可能性に変えようとしたところに楸邨の真価がある。明治、大正、昭和、平成の時代を生きぬいて、人間とは何かを創作の上に追求してきた楸邨の六十二年の句業を顧みるなら、今日の俳句の進むべき方向が自ずから見出されてくるであろう。加藤楸邨の再評価を望むものである。

(了)